

2020年6月24日

報道関係者各位

慶應義塾大学医学部

双極性障害における最善の薬剤治療

— 診療現場からの見解 —

慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室の内田裕之専任講師、櫻井準共同研究員は、日本臨床精神神経薬理学会のガイドライン整備事業に参画し、双極性障害の治療におけるさまざまな場面に最善と考えられる薬剤治療について、同学会が認定する専門医の意見を発表しました。

双極性障害の治療は、臨床試験の結果に基づいた診療ガイドラインが国内外で定められているものの、実際の診療現場から得られる見識についてまとめられたものは発表されていませんでした。

そこで、日本臨床精神神経薬理学会では、双極性障害の患者が経験するさまざまな状態をパターンに分け、それぞれにどの薬が最適か、専門医の見解を統合しました。

その結果、リチウムの単独治療や、リチウムと抗精神病薬を組み合わせた併用療法は、双極性障害のさまざまな状態で広く第一選択として推奨されることがわかりました。一方で、抗精神病薬の単独治療や抗うつ薬はいずれの状態でも第一選択とならず、ベンゾジアゼピン系薬剤は極力短い期間での使用が推奨されました。これらの専門医の見識は今後、科学的な研究によって検証されることが必要です。

今後、これらの専門医の見識が双極性障害の患者とその担当医師に共有されることで、この疾患の一つ一つの状態において最善と考えられる薬が明らかになり、双極性障害に対するより良い診療の普及に貢献するものと考えます。

今回の研究成果は、2020年6月17日、ワイリー社が発行する「Bipolar Disorders」（オンライン版）に掲載されました。

1. 研究の背景と概要

双極性障害はわが国の約1,000人に6人が一生の間にかかる病気で、気持ちの落ち込みや意欲の低下などがみられるうつ状態と、気分の高ぶりや興奮などに特徴づけられる躁状態をくりかえす疾患です。患者本人にとって特にうつ状態が辛いだけでなく、家族や身近にいる人たちにとっても激しい躁状態やふさぎこんだうつ状態の患者に接することは大きな負担になります。さらに、これらの症状によって社会的・経済的な損失を被ることも多くみられ、適切な治療が重要となっています。

双極性障害では薬を使った治療が中心となります。気分の変動を抑える気分安定薬、脳内

ドーパミンの機能を抑える抗精神病薬、脳内セロトニン・ノルアドレナリンの働きを増強させる抗うつ薬、不安感や不眠症状を軽減させるベンゾジアゼピン系薬剤などが、単独もしくは併用して使われます。

これらの薬の使い方は、国内・国外の診療ガイドラインで臨床試験の結果に基づく提言がなされていますが、臨床試験と実際の診療場面では少なからず設定の乖離があること、また、実際の診療場面で問題になる状況を想定した臨床試験が必ずしもないことから、診療ガイドラインの提言をそのまま実際の診療に用いることが適切であるかについては議論がありました。

2. 研究の成果と意義・今後の展開

そこで、慶應義塾大学医学部の内田裕之専任講師、櫻井準共同研究員が所属する日本臨床精神神経薬理学会は、医学教育委員会（獨協医科大学 古郡規雄委員長、関西医科大学 加藤正樹副委員長）が中心となり、双極性障害の患者が経験するさまざまな状態をパターンに分け、それぞれにどの薬が最善であるか、同学会が認定する専門医の意見をまとめました。

その結果、気分安定薬の一つであるリチウムの単独治療や、リチウムと抗精神病薬を組み合わせた併用療法が、双極性障害のさまざまな状態で広く第一選択として推奨されることがわかりました。一方で、抗精神病薬の単独治療や抗うつ薬はいずれの状態でも第一選択とならず、また、ベンゾジアゼピン系薬剤は頓服での使用や極力短い期間の処方が推奨されました。

双極性障害はうつ状態と躁状態という全く逆の状態が交互に現れるため、それぞれに対し薬剤治療をどのように変えるかは議論がありました。今回の結果は状態が変動しても、リチウムを中心に内服することを推奨するものでした。このようなうつ状態と躁状態の違いにこだわらないリチウムによる治療は、現在の症状に対する短期的な効果や再発予防に有用なだけでなく、状態に合わせて薬が変わることによる混乱の回避にもつながります。この総意は今後、科学的な研究によって検証することが必要であると考察しています。

この専門医の見識が双極性障害の患者とその担当医師に共有されることで、この疾患の一つ一つの状態において最善と考えられる薬が明らかになり、双極性障害に対するより良い診療の普及に貢献するものと考えます。

3. 特記事項

本研究は、2017年度 GSK 医学教育事業助成による日本臨床精神神経薬理学会に対する資金援助を受けて実施されました。

4. 論文

タイトル：Pharmacological Management of Bipolar Disorder: Japanese Expert Consensus
（日本語訳：双極性障害の薬物治療：日本の専門家の総意）

著者：櫻井準、加藤正樹、古郡規雄、鈴木健文、馬場元、渡邊衡一郎、稲田健、岸田郁子、菊池結花、菊地俊暁、香月あすか、内田裕之

掲載誌：「Bipolar Disorders」（オンライン版）

DOI：10.1111/bdi.12959

※ご取材の際には、事前に下記までご一報くださいますようお願い申し上げます。

※本リリースは文部科学記者会、科学記者会、厚生労働記者会、厚生日比谷クラブ、各社科学部等に送信しております。

【本発表資料のお問い合わせ先】

慶應義塾大学医学部 精神・神経科学教室
専任講師 内田 裕之（うちだ ひろゆき）
TEL : 03-5363-3829 FAX : 03-5379-0187
E-mail : hiroyuki_uchida@keio.jp

【本リリースの発信元】

慶應義塾大学
信濃町キャンパス総務課：鈴木・山崎
〒160-8582 東京都新宿区信濃町 35
TEL : 03-5363-3611 FAX : 03-5363-3612
E-mail : med-koho@adst.keio.ac.jp
<http://www.med.keio.ac.jp/>

※本リリースのカラー版をご希望の方は
上記までご連絡ください。